

平成27年度 学校評価（自己評価）報告書

		評価単位	評価のまとめ
教育課程	A	1. 教育目標	○年度当初に園全体や学年で共通理解を図り、教育の基盤として大切な観点が押さえられている。 ○幼児を取り巻く環境の変化を視野に入れつつ、今後も変わらない幼児の実態を押さえしていきたい。
		2. 教育課程の編成	○研究テーマと対応して「学びの概要」の細かい見直しをすることができた。 ○環境を丁寧に見直し、幼児の生活がより充実する取り組みを継続できた。
		3. 年間授業日数・時数 保育時間 お弁当のある日	○各学年に適した保育時間になっている。2学期後半、5歳児の降園時刻を15分繰り下げたことは集まりの時間の充実につながった。 ○5歳児は体力的に長時間保育を希望する声がある。保育時間の設定理由について、保育の内容や子どもの姿をわかりやすく丁寧に伝え、発信していく必要を感じている。
		4. 教育活動とその成果 計画 教材 環境構成	○毎朝の打ち合わせ、月に一度の拡大打ち合わせを確実に実施し、全教員で保育の現状と課題、行事等の段取りを共有できた。 ○4歳児学年は年度途中で非常勤教諭が交替し二人体制となったが、連絡し合い、連携が図れるように努めた。 ○幼児の実態や教師の願いなどを学年で共有する時間を今後もしっかりと確保し、保育を進めていきたい。
		5. 行事 式 誕生会 運動会 遠足 もちつき等	○毎年の行事を引き継ぐのではなく、今年度の実態に合った行事を吟味し、行えた。 ○学期ごとに内容や時期についての振り返りを丁寧に行い、来年度に活かせる内容になった。 ○「春を祝う会」でのプロの演技披露や「豆まき」での関取の参加は、幼児にとって有意義で嬉しい時間となった。
		6. 進路指導	○進路指導のためだけではなく、日常生活の中で5歳児一人ひとりの実態を園全体で確認する姿勢が整ってきている。 ○現体制の連絡進学で3年を経たが、引き続き指導の時期や内容の検討を重ねたい。また、小学校との協議も継続、発展させたい。 ○入園前の幼稚園説明会、5歳児進級後の保護者会等で進路選択について伝えてきているが、3、4歳児保護者への指導について考えていきたい。
		7. 研究・研修 合同研究 全附連 その他の研修	○園内研究会の時間を確保し、事例検討の話し合いを重ねることができ、より深くテーマにせまることができた。 ○幼小接続期研究は、E-BOOK発行に向けて継続研究しカリキュラムを発信できたが、保育や授業の実際や子どもの実態を話し合う時間確保は難しかった。 ○全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会長及び事務局、養護教諭部会長を引き受けて牽引してきた。 ○文部科学省委託研究「幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究」の実行委員長、ワーキング委員長を引き受け、研究を進めてきた。 ○ナーサリーやこども園との連携研究について、内容や時間の確保を考えていきたい。
学校運営 (教育課程を支える諸条件)	A	1. 経営・組織 園務分掌 会議等	○園務分掌を各担当者が責任をもって担い、確認、事後反省をすることで次につなげることができている。 ○教員一人ひとりの負担が大きいため、互いの仕事の進行状況や様子を意識し合い協力体制を強化したい。 ○2学期以降行事が多くなり残業が多くなりがちだった。効率的に仕事を進め、勤務時間を遵守できるように次年度も努めていきたい。
		2. 出納・経理 校費 委任経理金 一般・行事	○会計処理の方法が年々複雑になっているが、職員で共通認識に努め、正確に対応してきている。 ○今年度は会計処理のメが原則として1月末と前倒しになったが、全職員で年度末までの見通しをたて、必要な物を確認し合い、有効に執行できた。 ○教育後援会費を活用し、「春を祝う会」や「豆まき」での関取の参加、本の購入等、大変有意義に運用できた。
		3. 施設・設備 園舎 園庭 遊具	○園内環境が整い、遊びによってはアトリエなどの場所を子どもと共に選択し、有効に利用できた。 ○職員室、用務員室、保育室共に、温水の環境が改善されると良いと思う。 ○樹木医をお呼びするなど、樹木の手入れに力を入れることができた。今後、全体のデザインを考え、実のなる木などを植えられたらよいと思う。 ○様々なつながりの中で、相撲マットやバラのおうちのテフットを新規購入し、保育の充実に努めた。 ○園庭環境は自然豊かで、竹垣、土留めなども適材を利用しているが、メンテナンスは定期的に必要である。
		4. 健康	○メンタルヘルス調査や巡回指導は、専門家からの知見を得て、新たな視点に気づかされ、全職員で個々の課題などを共有できる機会となった。 ○スクールカウンセラーと保護者との相談が浸透し、保護者にとって有意義な時間となっている。
		5. 安全	○毎月の避難訓練は、段階を踏まえて丁寧に実施され、幼児、教職員にも定着している。今後も会議で振り返りを行い、教職員間で共有していきたい。 ○5歳児学年は、視聴覚教材を利用した訓練も実施できた。 ○日々の安全点検は、連絡を密にし、安全を確保できている。毎月の安全点検の徹底をはかり、見えにくいところの安全にも目配りしていきたい。
		6. 情報	○情報管理の重要性への意識を高め、ファイルの整理、保存に気をつけている。 ○大学のホームページ改変にあたり、幼稚園の情報公開の中身を検討し、HPのリニューアルを図りたい。
		7. 開かれた学校	○学校評議員会での意見を参考に、研究の充実や保護者アンケートの内容の改変を進めることができた。 ○筑波大学附属特別支援学校幼稚部との交流は、雨天でも実施でき、後日振り返りの会を行い有意義な時間となった。 ○文京区立のこども園が同一キャンパス内にできるので、連携をとっていきたい。
		8. 入園検定	○幼稚園説明会は3年目になり、定着している。 ○3次検定の方法を検討し、書類や作業の簡素化につながった。検定期間の短縮につなげるためには、今後さらに検討が必要である。
		9. 保護者との連携 保護者会 ボランティア 面談 つばみ会	○行事やボランティア活動に参加してもらい、子どもの姿に直に触れられる機会を設けてきた。 ○行事等の感想の提出や、面談や保護者会で話題に触れることで、子どもについて語り合うきっかけとなった。 ○ブログやライン等、保護者間でのコミュニケーションの有り様が変化していることを踏まえ、園からどのように発信していくことが大事かを考えたい。

B	大学との連携	1. 連携研究	<p>○メンタルヘルス調査や、運動能力に関する調査など、大学の研究に協力し、フィードバックを受けることができ有意義であった。</p> <p>○気仙沼市立幼稚園との交流は、3年目である今年、5名の園長、教諭の招聘が実現し、参観、保育や研究の情報交換等、互恵性のある活動となった。</p> <p>○公開研究会での講演、分科会の進行等、多様な場面で自他大学講師の指導協力を得ることができた。</p>
		2. 授業交流 大学・高校の 授業観察	<p>○臨床実習の講義では、記録がフィードバックされ、参観後に話し合いの時間を持つことができた。</p> <p>○附属中学3年生のCD科の授業枠で、事前の打ち合わせを丁寧に行い、7名の中学生を受け入れた。</p>
		3. 教育実習	<p>○前期、後期各10名の実習生を受け入れた。従来、指導を要さなかったような実習態度、日誌の記入等でより丁寧な指導が必要なケースがあった。</p> <p>○学生の動きなど「からだ」についてもっと意識的に伝えていかなければならないと感じた。</p> <p>○就職活動での遅刻早退が増えたことに伴い、大学側に対応を確認したところ、次年度からは大学側より指導が入ることにつながった。</p>
		4. 専門委員会	<p>○委員会での内容を会議で報告し、職員間で共有することに努めた。</p> <p>○研究推進専門委員会は、確認事項に要する時間が多いため、研究に向けて実質的な討議の場になると良いと思う</p>
		5. 大学の講義担当	<p>○「保育指導法」の担当、「臨床基礎実習」の参観受け入れを通して、保育現場で生活する実践者から学生に向けて、幼児教育の実際と大切な要点について発信を重ねた。</p>
		6. インターンシップ	<p>○2年継続しての副専攻の大学院生は、非常勤講師として、誠実に保育や降園後の仕事にあたり、園のスタッフとして力になった。</p> <p>○インターンシップは1名だったが、降園後の話し合いや保育の準備を通して、保育や子どもたちの理解につながっていた。</p>
B	社会貢献	1. 参観・研修受け入れ 国内・国外の参観	<p>○本園の使命に基づき、多数の参観を受け入れた。(国内約240名、海外約30名)</p> <p>○定期的に、自他大学の講師の参観を受け入れ、振り返りの時間を持ち、互恵的に学び合うことができた。</p> <p>○子どもたちの生活に支障のないように、参観前に副園長から参観上の留意点を伝えたり、時間を区切って副園長との話し合いの時間を持つようにした。</p>
		2. 公開研究会開催	<p>○年2回の実施が、負担なくできている。参観希望者が多い実態があるが、時期、回数ともに現状の体制が教師にとっては負担が少ない。6月は81名、2月は98名の参加を受け入れ、テーマに基づき、研究発信ができた。</p> <p>○申込方法が浸透し、締め切り後の問い合わせは減ってきた。</p> <p>○6月は学内講師、2月は本学関係者に協力を得ることができ、有意義であった。</p>
		3. 現職研修	<p>○8月にプロジェクト研究の最終報告会を行い、「幼小接続期研究部会」「相互交流型の授業・保育づくり部会」で報告を分担した。</p>
		4. 途上国支援	<p>○JICAと協力した中西部アフリカ研修受け入れは、運動会後という時期設定もよく、世界や様々な文化に触れる良い機会となった。</p> <p>○自分たちの生活についても、伝えたいという姿が見られ、互恵的な取り組みになっている。</p>
		5. 出版活動	<p>○研究部中心に2年間丁寧に研究を進め、紀要を発行するにいたった。</p> <p>○作成に向けてのプロセスにおいて、教師にとって多くの学びがあった。</p> <p>○紀要の英語版作成に着手することができた。</p> <p>○来年度の140周年に向けて、記念誌発行の準備を始めている。</p>
		6. 各種研究会への 協力・支援	<p>○保育学会において、企画シンポジウム「倉橋惣三の幼児教育思想の理解・継承と創造的実践」と、ポスター発表「探究する心を育むⅢ」を行った。</p> <p>○「子どもと保育実践研究会夏季全国大会」において、「子どもが探究するとき」についての実践提案を行った。</p> <p>○「全国幼児教育研究協会東京支部研修会」にて、「遊びの中の学びを見つめて」の講演を行った。</p> <p>○「幼児の教育」誌に3名が編集委員として、写真の選定や執筆者への連絡などを行った。保護者や参観者への啓発を行い、定期購読者確保に努めたり、全職員がアンケートに協力して、発刊存続に寄与している。</p> <p>○「ライブ×アート展」への協力を通して、他附属、大学と連携し、研究を深めた。</p>
		7. その他	<p>○旧職員、非常勤講師の協力体制のもと、歴史的資料の整理が進んでいる。幼稚園140年の歩みについて、資料を厳選し、説明内容の検討を重ね、1月に大学歴史資料館において記念特別展を開催した。</p> <p>○次年度の140周年記念行事に向けて、同窓会と協力して準備を進めている。</p>

平成27年度学校評価(自己評価)まとめ (課題)

<教育課程>

- ・全職員で連携を密に取り、環境や保育の質の向上をはかり、子どもたちが心と体を動かし、探究力・活用力を発揮するような教育実践を進めることができた。
- ・「探究力・活用力」の視点で「学びの概要」を見直し、改訂版を作成することができた。保育実践と結びつけ、さらに内容を省察していきたい。

<園運営>

- ・教育後援会を窓口にして保護者から集めた運営基金を有効活用し、園庭の環境改善を進めることができた。

<大学との連携>

- ・大学と気仙沼市教育委員会との「震災復興支援」共同研究3年目の今年度は、幼稚園では気仙沼市教員を招聘し、様々な研修プログラムを設け、互恵的な充実した研修を行えた。
- ・メンタルヘルス調査や運動能力に関する調査など大学の研究調査に協力し、幼児理解や研究の推進につながった。
- ・大学の歴史資料館との連携をはかり、幼稚園140年の歩みを広く公開し、歴史的に価値のある資料整理を進めることができた。

<社会貢献>

- ・お茶大が窓口となり、文科省の委託研究を受諾し、全国の附属幼稚園と連携して研究を促進してきた。
- ・2年間におよぶ研究成果をまとめた紀要を発行し、本園の教育、研究について広く発信した。